

[115]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1448720>

出版情報：語文研究. 115, 2013-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

澤山 修 著

『百人一首宗祇抄の研究』

その成立より宗祇の弟子達、三条西家、皇室でも継承され、江戸時代の歌人達にも享受された「百人一首宗祇抄」。本書はその作者と成立年代、そして注釈自体の特徴を考察した珠玉の一書である。

本書の構成は以下の通り。

まえがき

目次

序

第一編 宗祇の伝記と事績

はじめに

第二編 「宗祇抄」論

はじめに

第一章 「宗祇抄」の伝本、系統

第一節 「宗祇抄」の伝本

第二節 甲本系統と乙本系統

第三節 「延徳二年本」と「愚本」

第二章 「宗祇抄」注釈の成立

第一節 「宗祇抄」注釈の誕生

第二節 「宗祇抄」注釈研究史

第三節 「宗祇抄」と二条家

第三章 「宗祇抄」注釈の作者

第一節 「文明十年本」と「応永抄」

第二節 「宗祇抄」作者論

第三節 「応永抄」注釈の成立年代考

第四章 「宗祇抄」注釈の周辺

第一節 「古今和歌集聞書」(「両度聞書」)

第二節 「新古今和歌集聞書」(「新古今集聞書」)

第三節 「自讃歌注」

第五章 「宗祇抄」注釈論

第一節 「宗祇抄」注釈の形成

第二節 「宗祇抄」注釈の特徴

第六章 「宗祇抄」注釈の受容、享受

第一節 細川幽斎増補「新古今集聞書」

第二節 甫足家本「百人一首抄」

宗祇略年譜

結び

索引

あとがき

第一編は、宗祇の事績について年次順に叙述されたもの

で、宗祇その人を深く知るために有益な情報が豊富に記される。第二編は「宗祇抄」について、その伝本、成立、研究史、作者、他作品の注釈との関係、そして「宗祇抄」の注釈自体の特徴と受容、享受など「宗祇抄」に関わる様々な観点からの検討が加えられる。巻末「宗祇略年譜」には応永二十八年（二四二二）から文亀二年（一五〇二）までの年譜が記されている。著者の綿密な研究の上に成り立つ本書は、宗祇研究および「百人一首宗祇抄」研究において貴重な一書となろう。

（平成二十四年十月 雁回書房 A5版 五三四頁 一二、〇〇〇円＋税）

後藤康文 著

『日本古典文学読解考』

——『万葉』から『しのびね』まで——

本書は、平安朝仮名文学作品について、現存本文に固執する従来の説に疑問を呈し、誤写の可能性等を考慮した上で独自の読解を提示したものである。また、和歌と物語の作中歌に関する論考も併せて収録する。

本書の構成は以下の通り。

はじめに

I 平安朝仮名文学読解考

1 『竹取物語』読解・三題

一 「かみあけなとさうして」考

二 「はらくか」「人たに」考

三 「わが名はうかんるり」考

2 この「翁」は「嬬」である

3 『竹取物語』の本文批判——

——『伊勢物語』第四十五段考

4 『平中物語』初段の時間構造——

——誤写脱の見地から——

5 「いとわるき人なり」考

——『枕草子』の本文批判——

6 「ともなるこよひ」考

——『四条宮下野集』の本文批判——

7 現存本文という陥穽

——平安朝文学史の構想に際して——

II 和歌・作中歌読解考

1 神亀六年筑紫藤花の宴

——『万葉集』卷三・三二八～三三七番歌を読む——

2 天平二年筑紫梅花の宴

——『万葉集』卷五・八一五～八四六番歌の構造——

3 応和二年五月の贈答歌

——『蜻蛉日記』六六・六七・六八・七〇番歌の解釈——

飯倉洋一 著

4 『夜の寝覚』作中歌の背景と受容
附 中世王朝物語小見

1 『しのびね物語』の「尼君」をめぐる

2 〈紹介〉今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君』

初出一覽

あとがき

索引

第I部では、『竹取物語』を始めとする平安朝仮名文学作品について、現存本文を鵜呑みにすることの危険性を指摘し、今日一般に普及している諸注釈書の説にとらわれない新たな視点での読解が試みられている。第II部では、『万葉集』『蜻蛉日記』における和歌・作中歌について独自の見解が提示され、また、『夜の寝覚』の作中歌について先行歌の撰取や後世の和歌による受容の具体相が調査されている。さらに附録として、中世王朝物語に関する論考と新刊紹介を収載する。徹底的な現存本文の吟味によって定説を覆し、古典文学作品の解釈に新見を提示する画期的な本である。

(平成二十四年十月 新典社 A5版 二五四頁 七、五〇〇円)

『上田秋成——絆としての文芸』

本書は、孤高の作家として捉えられがちな上田秋成像を否定し、和歌や和文を通して多彩な人脈を築き、人や神との繋がりの中で生きた文人としての上田秋成を紹介している。本書の構成は以下の通り。

はじめに

序 章 新たな秋成像を求めて

第一章 秋成の人生を読む

一 大坂にて、失う人生

二 晩年を送った京都

第二章 歌文で繋がる——大坂で知り合った人々

一 妻・瑚璉尼

二 師・加藤宇万伎

三 中井竹山・履軒

四 兼葭堂・蕪村・宣長

第三章 歌文で親しむ——京都で交わった人々

一 小沢蘆庵

二 蘆庵社中

三 妙法院宮真仁法親王

四 正親町三条公則

五 伴蒿蹊と和文の会

第四章 秋成が感謝する神々

一 加島稲荷

二 神医、谷川三兄弟

第五章 『雨月物語』『春雨物語』を読み直す

一 『雨月物語』が描いたもの

二 江戸から読む『春雨物語』

三 偽りと倫理

あとがき

参考文献

現代において、上田秋成は『雨月物語』の作者として著名である。だが、江戸時代における彼の文人としての本領は小説にあるのではなかった。では何処にあるかと言えば、歌文や学問的な著述、すなわち雅の領域の著作にあったのだと本書では述べられている。また、これら秋成の著作の多くは写本という形で、特定の個人または神に向けて作られている。このことから、秋成の文芸作品の多くは、人や神と繋がるためのコミュニケーションツールとして機能していたことが本書では明らかにされている。

飯倉氏は序章末尾において、「私たちは江戸時代の文芸を、人との繋がりを築いていくツールという視点で見直していく必要がある。秋成文学も例外ではない」と述べておられる。

秋成文学だけに留まらず、江戸時代全体における文芸の果たした役割を考察する上でも、本書は重要な視点を提示しているものであると言える。

(平成二十四年十二月 大阪大学出版会 B6版 二五八頁 定価二〇〇円+税)

高山善行・青木博史・福田嘉一郎 編

『日本語文法史研究1』

本書は、日本語文法史研究の最新の成果を発信すべく編まれた論文集である。目次は以下の通り。

『日本語文法史研究』の刊行にあたって

被覆形・情態言・形状言・情態性語基

『万葉集』の「ムカ」について

古代語の動作主標識をめぐって

—— 助詞イと石垣法則 ——

モノゾ文による推量表現の成立

中古語指示副詞「かく」の照応用法

—— 「枕草子」「源氏物語」を資料として ——

中古語の非接続叙法体系

日本語の過去表現の構造とその変化

小柳智一
近藤要司

竹内史郎

勝又隆

西田隆政

福田嘉一郎

黒木邦彦

引用句派生の例示

岩田美穂

モダリティ形式「ラシイ」の成立

山本佐和子

クル型複合動詞の史的展開

—— 歴史的観点から見た統語的複合動詞 —— 青木博史

【テーマ解説】助動詞の相互承接

小田 勝

【文法史の名著】阪倉篤義著『日本語表現の流れ』 高山善行

日本語文法史研究文献目録二〇〇九—二〇一一

索引・執筆者紹介

本書は、文法史の分野で初となる継続刊行（隔年刊行予定）をめざした論文集、その創刊号に位置するものである。目次を一瞥して分かる通り、多様な観点から文法史に対して記述が行われている。本書に寄せられた研究論文において、時代は上代から近現代にいたるまで見られ、アプローチも語構成、構文、モダリティ等様々であり、扱う問題は多岐にわたっている。

また、研究論文以外の記述も充実している。文法史に関わるテーマを取り上げ、研究成果や今後の展望を解説する「テーマ解説」、名著といわれる書物を取り上げ、内容の紹介に加えて今日的な意義について述べる「文法史の名著」がそれである。さらに、直近三年の間に文法史に関して書かれた著書・論文を一覧の形で示した「日本語文法史研究文献目録」が巻末に添えられている。

「最新の成果を発信する」目標のもと編まれた本書に目を通すことで、文法史で今現在どのような問題が、どのような観点から議論されているかをつかむことができる。「継承性のない研究に新たな発展はない」と本書にあるように、研究を行う者は、自己の研究を「継承性」のあるものとするために、絶えず最新の研究の動向に目を向けていく必要がある。それゆえ本書は、文法史の研究を考える者に対し有益な示唆を与える一冊である。

（平成二十四年十二月 ひつじ書房 A5版 二二六頁 四〇〇円＋税）